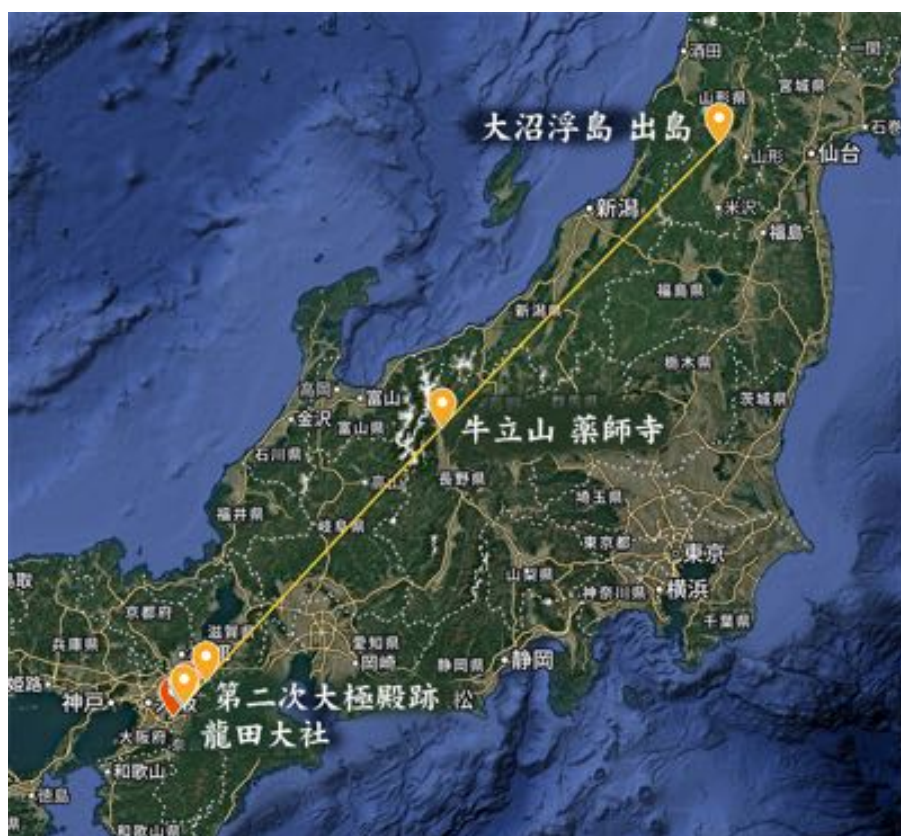


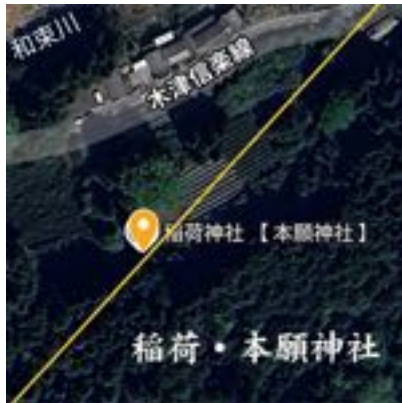
平城京第二次大極殿の鬼門とアテルイ像

●平城京第一次大極殿は大沼浮島の出島が鬼門に、そして松尾神社が裏鬼門に位置するように作られていた。詳しくは別頁「平城京第一次大極殿の鬼門」をご覧ください。ということは、第二次大極殿も大沼の出島と結べばどこかの裏鬼門の神社にぶつかるはず。さっそくやってみた。すると…



■龍田大社 → 六条山神社 → 垂仁天皇陵飛地は号陪塚 → 第二次大極殿 → 稲荷・本願神社 → 牛立山薬師寺 → 大沼浮島（出島）





■第二次大極殿

第一次大極殿は、恭仁京遷都時（740年）に恭仁宮に移築されました。恭仁宮、難波宮、紫香樂宮、へと移った都が、再び平城宮へ戻った時（745年）に、もとの第一次大極殿の東側に新設されたのが第二次大極殿です。

東区にはもともと天皇が日常の政務をおこなう大安殿という建物があり、国家的な儀式をおこなう第一次大極殿と使い分けられていたようです。大安殿の大極殿への建て替えにより、二つの機能を統合した新しい形の大極殿が誕生したとみられています。奈良市平城宮跡歴史公園

■龍田大社

今から約2100年前、第十代・崇神天皇の時代、国内に凶作や疫病が流行し騒然としているなか、天皇の御夢に大神様が現れ「吾が宮を朝日の日向かう処、夕日の日隠る処の龍田の立野の小野に定めまつりて…」という御神託を受けられました。その通りにお社を造営すると、作物は豊作、疫病は退散したと伝え

られ、これが当社の創建とされています。＜延喜式・龍田風神祭祝詞より＞

主祭神/

天御柱大神（あめのみはしらのおおかみ）（別名：志那都比古神(しなつひこのかみ)）

国御柱大神（くにのみはしらのおおかみ）（別名：志那都比売神(しなつひめのかみ)）

摂社/

龍田比古命(たつたひこのみこと)・龍田比売命(たつたひめのみこと)

「龍田」の地名は古く、初代神武天皇即位の頃までさかのぼり、龍田地区を守護されていた氏神様と伝えられる夫婦の神様です。＜延喜式・神名帳より＞

■大沼浮島（役の小角・弁財天）

湖畔にある大沼浮嶋稲荷神社（祭神/宇迦之御魂神）の神池とされ狐の形をしている。沼には大小の葦の島が風や流れに関係なく浮遊し、江戸時代には国の数 32 あり、その動きで吉凶を占っていたとされる。沼は白竜湖とも呼ばれ弁財天が祀られている。大円寺『朝日嶽縁起』（1505 年）によると、朝日岳の麓に御手洗の「大富沼」があると記されている。

白鳳 9 年（681）**役の小角**が弟子の覚道を連れて出羽路に来た折、大谷川（朝日町大谷）のほとりで梵字が記された板碑が流れくるのを見つけ、川をさかのぼり、60 余りの島が浮遊する神池大沼を見つけた。湖畔に浮島稲荷大明神を祀り、弟子覚道を別当（大行院）とし朝日岳修験が行われた。739 年には**行基**が訪れ浮島 66 個に国の名前を付けた。建久 4 年（1193）には寒河江荘地頭となった大江広元の進言により源頼朝の祈願所になり、その後も大江家、徳川家、最上家にも祈願所として崇敬された。国指定名勝。

山形県西村山郡朝日町大沼

備考/浮島は、現在は数も減り、岸に付き動かないことが多いが、動く時は流れや風に関係なく意志があるかのように動き回り驚く。出雲族東王家の**富家**の人々は出雲から大和の葛城山東側に移り住んだとされる。役の小角の生誕地は奈良県御所市茅原。まさに葛木山の東に位置する。大沼を「大富沼」、大朝日岳の神を「大富権現（弁財天）」と名付けたのも役の小角だろう。役の小角が天孫族秦氏の稲荷神を祀ることはありえない。なにより伏見稲荷よりも古い歴史になってしまう。730 年に「大沼社を南西の丘に移す」記述があるので、その時に秦族がやってきて主祭神を弁財天（瀬織津姫）から稲荷神に変えたのだと思われる。徐福が連れてきた海童たち秦族は蓬莱島信仰を持つ。自由に動き回る浮島は相当に魅力的だったはず。古い祭祀線はほとんどが稲荷神社ではなく大沼の鳥居の立つ「出島（弁天島）」(写真)が起点となっている。



●以前に大沼浮島の下流にある大谷集落の風神祭を見たことがあった。台風で稲がやられないためと、先祖供養の鎮魂の意味があるらしい。古式に則った夜の神輿渡御で感激した。神輿の通る道には、清めとして新しい一握み分の砂を点々と置きつけていた。神様が各家に福をもたらしてくれるよう各家の玄関や縁側まで繋げてあった。そこにお供えと提灯や燈明が置いて



●さて、第二次大極殿の真ん中にラインを通すと龍田大社に拝殿裏にぶつかる。たくさんの境内社の真ん中で各神様のご神氣を得られるようにしているのだろうか。これでも十分に不思議な一致なのだけれど、本殿でないのが気になった。



●ライン上にある寺社は以下となる。

■六条山神社 詳細不明 奈良市六条西5丁目16

■垂仁天皇陵飛地は号陪塚

宝来山古墳（垂仁天皇陵）の南方に位置する。内容は詳らかでないが、実際に古墳である可能性が指摘される。

■稲荷・本願神社 詳細不明 京都府相楽郡和束町湯船岩倉 4 3 3

■牛立山薬師寺

静御前は、義経を追って、奥州平泉に行きたかった。母の磯禅師と向かった。松本まで来た時、奥州はどっちと聞いた。安曇野の北に大塩村があって、土地の人は、おおしゅう村と読んでいた。その村を教えられ向かった。10も程手前のお寺の前で、同行していた牛がすわってしまった。牛よ立てと言っても、もう疲れて、動けない。母の磯禅師と先に進む。教えられた大塩村に、やっとたどり着いた。しかし、鎌倉で、我が子を殺されていた彼女は、心も体も疲れ切っていた。その地で力尽きた。彼女の持っていた桜の木の杖は、土に刺し、大きく育った。800年を過ぎた今、見事な巨木になり、花を咲かせる。



寺の後ろには、静御前の墓といわれている、勧融院静円妙止大姉、文治五巳酉年九月二十三日と刻まれた墓碑がある。長野県大田市社松崎 6 3 6 2 ※写真は牛立山薬師寺のフェイスブックより拝借

●他にもいくつかの寺社があったが新しいものだったので割愛した。

●牛立山薬師寺も割愛しようか迷ったが、よく読むと静御前が亡くなって寺が建てられたのではなく、寺の前で牛が動かなくなったとあるので、鎌倉時代以前からあった古い寺といえる。

●そして、実は義経伝説は大沼浮島にもあるのだ。義経記には書かれていないが、朝日町には義経一行が奥州に向かう前に大沼にも滞在していた言い伝えが残っている。北の方（郷御前）が子を産んだ子なし沢もある。東北では「なす」は産むという意味がある。子をなす（し）た→子を産んだ。そして大沼大行院に泊まって宿代の代わりに置いていった弁慶の筧が残っている。格式の高い作りで大型らしい。弁慶の筧はあちこちにあるらしいが、ここの筧には梵字で武蔵坊と書かれてある。これは全国で唯一だそうだ。弁慶はその筧に牛立山と同じ薬師如来の小さな像を入れていた。義経は日高見国の奥州に亡命しに向かっていたのである。朝日岳が出雲族の信仰地だったのだから、安倍家の血をくむ奥州藤原氏につながる山伏たちがいたはず。朝日岳信仰の一大拠点だった大沼は、長旅で疲れた体をゆっくり休ませられる秘密の場所だったに違いない。だから義経記に書かれることはなかったのだ。その朝日岳信仰も残念ながら北条執権時頼によってまもなく千年封じされてしまうのだが。

●それに、義経記が書かれたのは義経が打ち取られた文治5年（1189年）から150～200年後。正確だとはとても言い難い。

●薬師如来つながりが気になった。

そこで、もしかしたらと、この鬼門ラインをもっと北東に伸ばしてみた。



●すると、衣川を経て奥州市につながった。牛立山薬師堂に静御前の墓がある理由は、義経に繋がれる祈りのラインだったからではないだろうか。静御前が、義経と繋がれるこの場所で、義経安寧のため、あるいは弔いのための祈願を亡くなるまでしていたと素直に考えたい。少なくとも静御前の祈願寺だったことは間違いないのではないだろうか。いつか絶対にお墓参りに訪ねてみようと思う。

●奥州市のどこかの社寺と繋がっていないかを調べたが、残念ながら見つからなかった。
しかし…



■牛立山薬師寺 → 大沼浮島（出島）→ 『北方の王者 アテルイ』像

●奇しくもそのラインは奥州市にある『北方の王者 アテルイ』像にピンポイントでつながった。まるで「その考えで間違っていないよ」とアテルイが肯定してくれたように感じた。

■北方の王者アテルイ像

平成4年（1992）10月20日、水沢市（現奥州市水沢）常盤地区のストリートシンボルとして製作され、東大通り三丁目のアテルイ広場の西奥に設置された。表面に抽象化したアテルイの顔が描かれた大火炎土器の形状で、高さ約6m、上部直径約3m、下部約2mの円筒形。夜間は赤い目が光るようになっている。市内の及川哲夫氏の制作で「北方の王者アテルイ」の題名がある。



●アテルイ像がここに建てられたことで大切な意味が生まれた。ここを訪れた人々はアテルイのみならず時代に虐げられた蝦夷の日高見国に思いを馳せてくれる。この祭祀線はその戦いの舞台だった奥州市と正式につながった。龍田の風の神が浮かばれない多くの魂たちに鎮魂のやさしい風を吹かせてくれている。静御前の義経を思う祈りもついに奥州とつながった。

（2025年11月22日 竜天太陽記）